



復興と次世代のグローバル社会にむけて

岩手県・岩手県立不来方高等学校 3年 丸山 風音

東日本大震災で多くの国から支援を受けた日本。欧米の資本主義諸国もさることながら、途上国であるタイのスラム街の子どもたちから100万円の寄付が届けられたことを、どれだけの日本人が知っているだろうか。この2月、私はキズナ強化プロジェクト企画で、震災の風化防止のためにクラスメート10数名と共に、約10日間の滞在でタイを訪問した。

タイを訪問する前は、タイについて私たちが知っていたことはアジアであること、トムヤムクンなどのタイ料理についてくらいだった。そのため、バンコクに着いた時は立ち並ぶ高層ビルや、車道を走るトゥクトゥクやバイクタクシー、人ごみの中を歩く僧侶たちなど、はじめてみる光景ばかりで驚いた。また、日本製品の多さにも驚いた。町を走る車はほとんど日本車、コンビニに行けば日本のお菓子や緑茶が売っていた。交流した学生や、お店の店員の方も日本のことをよく知っており、自分がタイについてほとんど知らなかったことを恥ずかしく思った。しかも、東日本大震災についても、タイでは風化が進んでいない。テレビをつければ、日本の避難訓練の様子や、避難所の生活を放送していた。現地の方によると、それは毎日のことだと言う。日本から来たと言うと、みんな津波や震災のことに関心が高く、当時の話もとても熱心に聞いてくれた。ところが、タイで出会った日本人観光客から、「岩手？ 東北のどこ？」「岩手の子って標準語話せるんだね。」などの言葉が震災のことよりも先に問われ、逆に日本国内の風化の深刻さを思い知らされた。

タイでは頻繁に洪水が起こる。そのため、防災意識が非常に高い。東日本大震災をうけて、タイの学校でも防災のために避難訓練を取り入れたという。「日本は防災の手本です。」と現地の方から何度も言われた。そして、交流した高校生たちはみんな洪水の原因や被害の状況を把握していた。

交流会では、日本の震災とタイの洪水についてプレゼンテーションをしあい、





その後防災についてグループで話し合った。事前に私たちは、岩手の被害状況を、写真やデータで分かりやすく示したものを準備していった。私たちの誰もがあの大地震を体感し、被災地をこの目で見て、震災直後からのインフラのストップした生活を経験し、なにかしら被害にあっている。

私たちの報告を、うなずきながら、聞き入るタイの高校生たちは、タイでの洪水対策も語ってくれた。彼らの報告を聞いて、むしろタイでの防災の実践を日本の津波の対策にも取り入れることができるのかもしれないと、熱心に話す彼らと接して私は思った。

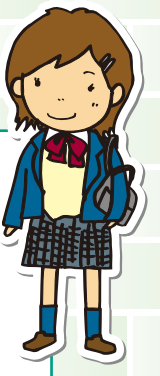
次に驚いたのが、語学力の高さだ。首都のバンコクはもちろん、郊外の学校の生徒でも、英語はもちろん日本語も堪能だった。日本語の授業に現地の学生と共に出席した際、授業はほとんど日本語で行われる、いわゆるイマージョンプログラムだった。日本は先進国だが、2カ国語を自在に話す高校生がどれだけいるだろうか。外国人と会話ができるということは、それだけ世界が広がり、多様な考え方を知ることになる。現状の問題を解決する糸口も得られる。

日本は「おもてなしの国」と言われるが、私はタイのおもてなしの心に感動した。現地の高校で交流会をした際は、ただタイの文化を見せられるだけでなく、タイ舞踊や料理など一緒に体験をすることができた。一緒に作った伝統の操り人形が御土産おみやげとなった。作業の間中、高校生みんなが日本語で「楽しいですか?」「タイにまた来てください」「ずっと友だちだよ」と声をかけてくれ、とてもうれしかった。会の最後には、みんなで輪になって「今日の日はさようなら」を日本語で歌った。ホームステイ先ではお別れの日、いつの間にか作ってくださっていたのだろうか、滞在中の様々なショットの私の写真をまとめたアルバムをいただいた。心からのタイの人たちの「おもてなし」を受けて、参加者みんなタイが大好きになった。

さて、このような経験を経てきた私たちは、高校生でもできるアクションとして、「フェアトレード with 不來方こずかた」をクラス全員40人で今年(2013年)5月18日に自主企画し盛岡市内の商業施設で開催した。

フェアトレードとは、貧困のない公正な社会を作るための新しい貿易の形である。そもそもこのイベントを行うきっかけになったのは、「募金のような“支援してあげる”という上から目線の姿勢に疑問を感じる」というクラスメート





の意見だった。日本に輸入されるものの多くは、中間業者に賃金が搾取され、生産者にはほんのわずかししか収入がなく、厳しい生活を強いられている。募金やボランティアを毎日続けるのは難しい。しかし、買い物なら毎日することだ。同情の気持ちからではなく、「欲しいものを買う」というだけで、生産者が自立した物づくりを支援することにつながる。

そこで、私たちは、ベトナム戦争で被害を受けタイの難民となったラオス・モン族の支援を考えることになった。ただ募金してお金を送るのではなく、彼らが作った伝統的な刺繡^{ししゅう}雑貨を公正な価格で取引販売し、その売り上げを村へ送る。資金援助のみの一方的な支援ではなく、持続可能な生活支援で、両者の利益につながる相方的な関係である。

まず、ラオスで支援活動をしている方に連絡をとり、現地から、手刺繡のクラフトをいろいろ空輸してもらうことにした。しばらくして、繊細で鮮やかな刺繡に彩られた、ストラップやポーチが学校にたくさん届けられた。教室で荷解きをした瞬間、その美しさに歓声が上がった。名もない、貧しい村から届けられたそれらの品々は、教室の中で咲いた花々のように私たちの心をときめかせた。聞けば、子どもたちが学校や農作業の合間に作った刺繡クラフトもあるのだと言う。早速、私たちは、一つ一つ値札を付け、袋詰めをしていった。刺繡の模様にはそれぞれ意味があるというので、文献やネットで調べて、分かりやすく「無病息災、子孫繁栄、健康、恋愛成就」などと書いたシールを貼っていった。

また、盛岡市内のフェアトレードショップをめぐる、委託販売の願いをして、商品を預かり、販売許可を得た。フェアトレードのコーヒーや、クッキーを出す呈茶コーナーや、とんぼ玉を使ったアクセサリー作りの体験コーナーも設置することにして、ゆっくり来店者が、私たちと話をしたり、活動の様子を見ていただいたりできるように準備をした。

そして、イベント当日。会場となった盛岡市内の商業施設の一角には、ネパール、インド、ベトナム、タイ、ラオスなど約30数カ国の手工芸品や雑貨など250種類もの品々が所狭しと並べられ、活動報告パネルが、展示ボードに貼られ、喫茶コーナーも作られた。チラシや、看板ボードを持った宣伝担当の生徒が、街角に立ち、声を出して道行く人たちにイベントをアピールし、集客に努め、会場に来たお客様には、接客担当が積極的に話しかけ、アプローチをした。





たった1日だけの開催にも関わらず、のべ300人近いたくさんの方々が足を運んでくださり、イベントを通し、フェアトレード商品の販売はもちろん、フェアトレードに興味を持ってもらうことや、パネル展示をして、先のタイ派遣の学びも報告発信することができた。私たちは、ふだんは接することのない、様々な年齢層の方々と話をする機会になり、アジアやアフリカに旅をしたり、赴任したりしたご経験のある方からも、いろいろなお話が聴ける機会にもなった。また、会場では、震災以来、被災地訪問演奏を続けている同高校の音楽部有志による合唱ミニコンサートも開かれ、思いがけず、外務省出身でもある現岩手県知事の来訪も得て、大きな成果となった。

「復興には、次世代を担う若者を育成すべき」、とよく言われるが、外国語を共通言語のツールとして、国同士が学び合い、どちらも有益な交渉と経済発展をしていく必要がある。ただ、経済発展は物を作って売り買いするだけで、消費をあおり、ゴミを増やし、経済弱者である第三世界の自然を破壊するという、前時代的な認識ではいけない。例えば、ラオス・モン族は、ベトナム戦争により故郷を失い、難民生活を余儀なくされた。それでも脈々と受け継がれている伝統刺繍や織物の手仕事に見るように、長年人間の力で培われた技を残し、今は、それを自立へ向ける手段に変えている。このような次世代へ伝える暮らしをつくるシステムづくりが大切なのではないだろうか。

何でも機械化し、人件費を削減し続けたことで、その国独自の伝統の技を継承する機会を失い、文化を失ってきた先進国のようになっては、真のグローバル社会経済の発達とは言えないのではないか。私たちには世界を変えることはできないかもしれない。しかし、自分が気付き、行動を起こすことで周りの人たちの意識を変えていくことはできる。

以上のように、私は、これらの経験を生かして、被災県出身の次世代を担う一人として、フェアな国際貢献をこれから目指していきたいと考えている。そのために、大学へ進学して、より多くの専門知識を得、語学力を磨き、自分の目で、足で、海外の土地を見て歩き、様々な文化や自然、人の価値観に触れていきたい。

今、自室に飾られたタイやモン族の美しい刺繍クラフトを眺めながら、私は日夜、受験勉強に励んでいる。一針一針に込められた人々の思いと共に、それから広がる、未知の世界を知る旅を夢見ながら。

